

第185回新潟循環器談話会例会

日時 平成2年12月1日(土)
午後3時より
会場 新潟大学医学部第五講堂

I. 一般演題

1) 心疾患におけるミオシン軽鎖の変動

宮北 靖・小山 仙
渡辺 賢一・井上 正則(燕労災病院内科)
政二 文明(桑名病院
循環器内科)

心筋における収縮の最小単位である筋原線維を構成する収縮蛋白のミオシンと特異的に結合するモノクローナル抗体が開発されている。我々はこれを用い心疾患における有用性を検討した。対象としたのは115例250検体でこのうち24症例89検体に異常高値を認めた。急性心筋梗塞では全例に異常高値を認め、その最高値は慢性期心機能と相関を示すものと考えられた。陳旧性心筋梗塞では10例中3例、狭心症では28例中2例に異常値を認め、微小な心筋障害の関与が示唆された。また糖尿病の症例では7例中2例に異常値を認めるもののホルター心電図、運動負荷試験にて虚血性心疾患を示唆する有力な所見を認めず、なお検討を要するものと思われる。ミオシン軽鎖の異常値は心筋梗塞の重症度、梗塞量に重要な情報を提供し、更に狭心症、陳旧性心筋梗塞の微小心筋障害に対して従来の酵素の測定より鋭敏である反面、腎機能障害の症例でも多く異常値が検出され今後の検討が必要と思われた。

2) DDD モードにおける spike on T 現象について

北沢 仁・笹川 哲哉
滝沢 英昭・山崎 雅俊
古川 達雄・嶋津 芳典
小田 栄司・斎藤 良一(新潟県厚生連村上
病院内科)
渡部 重則

症例：79才女性。昭和59年7月洞不全症候群の診断にて某院でDDD植え込み施行。昭和61年12月心室センシング不全のためジェネレータ交換(Siemens AV mode 704)、以後当院内科で経過観察中平成2年7月心電図上 spike on T 認めたため精査した。

ホルター心電図ではP波の undersense に引き続きR波の後に心室刺激を認める場合と心房性期外収縮のP波を sense した後に心室同期ペースングが起り spike

on T を来たしている場合があった。前者は心房のセンシング不全で説明できモードを単に VVI に変更することにより消失したが、P波の sense 後の spike on T はプログラムされた心室上限レート(160)では起こりうる現象と考えられた。

この DDD の malfunction に関して検討を行なったので若干の文献的考察を加え報告する。

II. テーマ演題「心不全」

1) 心不全で失った大動脈縮窄複合の1例
—剖検所見との対比—

片岡 哲・佐藤 勇
堺 薫(新潟大学小児科)
宮村 治男(同 第二外科)
福田 剛明(同 第二病理)

症例は27生日 男児。生後2週頃より喘鳴が出現するため当科を受診した。初診時より心不全状態でチアノーゼ、鼻翼・陥没呼吸があり、胸部聴診にて心雑音が認められた。

心エコーで VSD、PH と診断され利尿剤、強心剤が投与されたが、症状は改善しなかった。その後 MRI にて大動脈縮窄が認められ、心カテでは既に inoperable の状態であった。61生日で死亡。

今回経験した症例を提示し、剖検所見とを比較検討する。

2) 心不全を伴った急性心筋梗塞例の検討

鈴木 薫・木戸 生成
熊倉 貞(新発田病院内科)

目的：ポンプ不全を伴った急性心筋梗塞例の臨床的特徴を検討した。対象：対象は、昭和51年から平成元年の間に当科に入院した急性心筋梗塞、のべ326である。これらの例を入院時の状態より心不全の無い Killip I 群例(I群)、心不全例(Killip II, III群: II, III群)、ショック例(Killip IV群: IV群)にわけ、梗塞部位、年齢、死亡率、死亡原因等について検討した。結果：心不全は下壁梗塞例に比し、前壁、広範前壁梗塞例に出現頻度が高く、また65才以上の例に出現しやすかった。IV群の頻度は、下壁梗塞例と前壁梗塞例の間に差は認めなかったが、広範前壁梗塞例が高かった。また加齢と伴に頻度が増加したが、特に75才以上で高かった。死亡率はI群12%、II, III群33%、IV群86%であったが、各群において死亡原因、死亡までの時間が異なった。加齢と伴に死亡率が増加したが、特に65才以上のIV群で高かった。